
第3章 没後30周年、2020年代における 土屋健治作品の先端性： 感情史とブリック・ヒストリーの観点から

ひととひとが心を通い合わせることができ、明日が今日よりも良くなることを信じ、勝つために闘うのではなく（場合によっては敗れることが解っていても）自分を越える価値のために闘う、そういう時間と空間を、私どもの前に、静かに、やさしく、開いてみせてくださいましたことに、ここから御礼を申し述べさせていただきます。

そういう時間と空間がたしかに存在するのだということをしみじみと思うこと、そこへの共感と想像力を除いて、＜地域研究＞をすることの意味はないと思います（池端雪浦への手紙）。（『土屋健治追悼集』刊行会編 1996:371）

学際的な雑誌『エモーション・レビュー』の最近の特集において、歴史家ピーター・スターンズは同僚の研究者たちを批判した。感情史を専門とする歴史家は、以前は、社会学者、人類学者、心理学者、そして哲学者の研究を読み、こうした専門に向けて発信していた。しかし、感情史が急激に進展する過程で、この分野は内向きになり、他の歴史家に向けてのみ、あるいは、一層狭くアメリカ史、近世史などといった特定の分野の歴史家だけに発信するようになった。今日でも「学際性」は存在するが、それは音楽、美術、文学といった人文学内の専門家との交流を指すものとなっている。いまや科学と歴史のあいだの溝は深く、スターンズは「これがどの専門家にとっても現実的な損害をもたらすであろうことを危惧する。」と断じている（ローゼンワイン、クリスティアニーニ 2021:162）。

1. はじめに

本章は、第一章、第二章と異なり、将来執筆される、感情史を取り入れた土屋健治論¹の準備ノートの役割

を果たす。土屋が執筆した地域研究の作品のうち『カルティニの風景』（1991）に焦点を当てる。本書において土屋が自らの感性（感情と共感）に由来する意識の表現を優先させたことの光と影を、2020年代の日本で受容された感情史の知見を通して理解し、その先端性と時代的制約を確認する。

『カルティニの風景』が出版された1991年に、歴史学の一分野としての感情史は日本では知られていなかった。欧米では1970年頃から開始されたと言うが、当時非西欧の研究はほとんどなかった。フィリピン革命の思想史を専門とする池端雪浦はナショナリズムの背景を描く本書を書評で次のように記す。

（1970年代初め、ジョクジャカルタ下宿先のジャワ人の応接室には風景画が掛けられていた。－引用者注）著者は、これらの風景画がノスタルジアの心性と結びついていることに着目する。このノスタルジアは筆者がクロンチョン音楽を聴くたびに感じる心性であり、若い日に読んだカルティニの書簡集が湛えていた情感に通じるものであった。ここから著者は、自らのうちに想起されるノスタルジアの心性をよすがにして、「美しい熱帯」の風景画と、インドネシア・ナショナリズムのとば口に屹立するカルティニが描く心象風景と、そしてクロンチョン音楽とを結び合わせて、それらの誕生と展開と再生の筋道を辿るなかで、カルティニ以降約百年間のインドネシア・ナショナリズムの風景を描き出すことができるのではないかと見通しを立てたのである（池端 1993:155）。

内容は、中等教育からタマンシスワ研究まで、タマンシスワ研究の終了から『カルティニの風景』を上梓するまでの移行過程、開発独裁下のインドネシア繁栄の受け入れがたさなどである。あわせて東南アジアの独立運動に若き日の自分の理想を重ねた世代の時代背景も検討する。桜井由躬雄も第三次インドシナ戦争を前にして「昔惚れた女が娼婦になったみたいだ。」と嘆いていた。土屋健治論へのメモは注に書くこととする。

1 「土屋健治とその時代」を仮題とした論考を予定しており、

池端は、土屋自身の「心性」の活用を新しい手法と見なした。ベトナム前近代史を専門とする東洋学の泰斗山本達郎も、実際の史料の取り扱いで客観的動向と意味世界の両者の把握を同時に行うのは容易ではないが、見事に展開して独創的な業績であると評価した（『土屋健治追悼集』刊行会編 1996: 551）。

その一方で、桜井由躬雄は実証性のなさを批判した。

私は土屋さんの晩年の書『カルティニの風景』をどうしても評価できなかった。それは思い込みだよ、土屋さん。（中略）土屋さんはかつてのインドネシア民族史研究のように、深いテキスト分析によって論を展開すべきで、自分の「ひとりよがり」のイメージが強すぎる。自分のイメージの押し売りはもはや学問ではない。そのころはそう思った。そのたびに土屋さんは不愉快な顔を隠さなかった（桜井 1997:432-433）。

確かに、文字資料その他の史資料の利用や具体的事例での自論の裏付けという点で、本書は弱点が多かった。専門書でなく一般向けと言うことで本書を可とする研究者が多かった。

しかし21世紀に入って欧米で感情史が盛んとなり、2020年代日本にも波及すると「あなたたちが見ないようにして来た感情と言うものが研究の上でも非常に重要なものではないでしょうか。」（森田 2023:10）という観点、およびアカデミズムの研究と社会の乖離の激しい日本の歴史学の現状から、本書の可能性が広がって来た。

次節では現在における感情への注目から感情史の動向を略述し、『カルティニの風景』の先端性を指摘する。第3節では『カルティニの風景』の具体的議論にそって、土屋の提示した、ノスタルジアがナショナリズムに繋がる論理、共感・感動が時空を超える分析を説明したのち、土屋自身のよりよい未来への希求がもたらす時間軸の枠組の解放性を指摘する。第4節では2020年代に生きる土屋の思考について、時間軸の枠組が現在まで延長可能であること、およびパブリック・ヒストリーとの交差を述べる。第5節では、土屋がなお有する20世紀的制約を指摘し、合わせてインドネシア地域研究の中で20世紀がどのような時代であったかを考える。

2. 感情への注目と感情史

2020年代は、SNSにおける大量のネガティブな感情表現が人を動かし、SNSのコンテンツが選挙結果

をも左右する事態が見られるようになった時代である。

政治思想史を専門とする山本圭は「現代は私的な領域に秘匿され、沈黙させられていた情念を再発見した時代であり、政治学や政治理論は感情と向き合うことを余儀なくされている。」（山本 2023:158）と言い。西洋史を専門とする小野寺卓也は「インターネットがなかったら感情と言うテーマがこれほど大事だとは思わなかったでしょう。」（小野寺・森田 2023:13）と述べる。

感情史は、欧米では歴史が長く既に1970年代に存在した。感情を観点として史資料を読み直す。「感情史とはあくまで歴史学の一つのアプローチ。新しい史料の読み方であって全く別の何かではないということです。」（森田 2023:10）

しかし2020年代でも未だ制度化されていないと言える。研究対象の感情の輪郭が確定していず、研究視角や手法が明確に存在しない（森田 2016:51）。研究対象のとりあえずの括りは、感情が生起する原因と感情が外側に現れ出たものの記録である。たとえば「大きな犬が吠えたから怖い思い逃げた。」のうち「怖い」は心理学の領域なので扱わない（森田 2020:48）。

また様々な分野を結び付ける可能性を持っている。森田は、感情史が歴史学以外の学問とも盛んにコミュニケーションしていること、多様な学際的研究が生まれていることを指摘し、さらに感情と言う言葉を使うことでより広くの分野の壁を越えられることは魅力的であると述べる（森田 2023:10,12）。

この状況は1970・80年代に土屋が研究対象に取り組んでいた東南アジア地域研究の状況に似る。そして土屋の『カルティニの風景』は、感情（ノスタルジア・共感など）によって風景画、カルティニ書簡集、クロンチョン音楽などを結び付けるほか、絵画史、音楽史、文学史、政治史など分野横断的であり、森田の言う感情史の特長を持つ。1995年に亡くなった土屋は感情史の動向を知らなかった可能性が大きい。しかし東南アジアを対象とした研究が希少な中で、事例研究として無意識に行われていた密度の高い研究と言える。

以上を踏まえて、『カルティニの風景』で土屋が使用した分析方法が、2020年代の感情史に対して先見性を持つ点をあらかじめ述べる。

- 1) 人間の普遍的な感情を掬い取るのが巧である²。
- 2) 感情の分析は史料が限られるために難易度が高く、

2 土屋は文学青年を自称し、小説を大量に読んだ。押川典昭によれば特に日本の小説、なかでも中上健次を好み、また柄谷行人の論じる日本の風景の誕生にヒントを得たという。

近代かつ親密圏、共同体に限定されがちであるが、多数の人々の共感に着目した土屋の客観的分析方法は公共圏と呼ばれる領域でナショナリズムへと接続されている。また物事が時空を超えて共感されることを具体的に示した。

3) 土屋の、若者の喪失感および悲しみの表現への着目と、インドネシアのよりよい未来への祈りとがナショナリズムを越えさせ、2020年代以降の新たな共感の共同体への可能性を開いた。

4) 若者への注目が世代論の可能性を開いた。カルティニは若くして亡くなり、独立運動も若者が主役だった。初期のクロンチョン・1980年代の現在の音楽シーンも若者が主役であり、さらに土屋氏にとって「わが古き良きジョクジャカルタ時代」は若者であったときの思い出である³。翻って独立以降に公定ナショナリズムを住民に押し付ける主役は中高年男性なのかもしれない。

5) 喪失感への着目が分野横断への道を開いた。カルティニが持った喪失感、カルティニを失った世界、クロンチョン、エヴィートの歌詞に見られる喪失感などが、ノスタルジア、喪失が意味を求める傾向、パブリック・ヒストリーの実践における歴史との関係と接続し、文学はもとより心理学や歴史学とも交差している⁴。

6) こうして共感を重視し、これを的確に捉えたことによって土屋はナショナリズムを相対化して未来への開放性を確保し、2020年代の感情史的観点からはB. アンダーソンを大きく超えることになった。

次節では、以上の諸点を『カルティニの風景』の本文を検討しつつ示す。

3. 『カルティニの風景』本文の検討

3.1 カルティニ書簡中の風景描写におけるノスタルジアからナショナリズムへ

本書は、はじめに土屋がカルティニを取り上げた経緯とカルティニの生涯と時代背景が述べられ、その後第4章にあたる「風景の誕生」と題した章で、ノスタルジアがナショナリズムに繋がる議論を展開するために、カルティニの風景描写が検討される。

風景描写は少ないが、ジャワ人が書いた風景としては画期的と言う。それはカルティニがオランダ語に堪能で、西洋の文法である「私」を獲得し、「私が

見る」という書き方ができるようになったこと、および神智学の影響を受けて、神の作った「美しい自然」・神への感謝という観念および美しい自然に関する決まり文句を得たことでもたらされた（土屋 1991:84-85）。以下の4例の引用中最初の2例は、カルティニが母と呼んだアベンダノン夫人宛である。夫のアベンダノンは当時、植民地政府教育文化省長官でありカルティニの擁護者であった。風景描写だけではなく、カルティニ自身も描写の中にあり、自然はカルティニの精神と交流するものとして描かれる。

夕方わたしはホンフレープ夫人とご一緒に海辺へまいりました。私は水浴びをしました。海は青く澄んで一様な色をたたえていました。わたしはそばの珊瑚礁に腰を下ろし、水の中に足を浸し、そしてはるか視界の尽きるまで眺め渡しました。まあ、なんて大地はすばらしく美しいんでしょう。歓喜と感謝の念と平和とが心にしみわたります。母なる自然 Moether Natuur は、わたしどもが慰めを求めれば、それに取り合わずに行き過ぎてしまうことは決してありません（土屋 1991:82）。

思いにふけてわたしは外を眺めやり、青空を見つめます。まるでそこに、わたしの魂の中に吹きつっている疑問に対する答えを期待するかのよう。思わず知らず私の目は、大空を流れていく雲の群れを追っています。雲は、椰子の葉をふるわせたのちに流れ去ってゆきます。ふと、私の目は黄金色の日の光に映えてきらめきふるえている小さな葉にひきつけられます（土屋 1991:82）。

以下の例では神への感謝が主体で自然は抽象的に描かれている。

わたしどもが鳥の歌声という美しい交響曲を耳にして我を忘れる時に、神がわたしどもを耳が不自由なままで生んでくださらなかったことに感謝します。クレイン・スヘーフェニンゲンにあって、すべてが静謐で平和で詩的であり、また太陽がこの上なく美しく沈んでゆくその夢のような海辺を目の前にする時、わたしどもによく見える眼が授けられていることに対する感謝の念はいやまざるのです。そしてまた、みわたす限り天にまで至るさざなみに不思議なかがやきと色紋とが広がるのを目にして、森羅万象 (het Al) を形づくりこれを統べている不可視の偉大

3 若者への注目に加えて、右翼思想への傾倒の起源についてクラブ活動をはじめとする中等教育時代の検討が必要である。

4 土屋自身の敬愛する人々の死、若さの喪失との関連性も検討する必要がある。

な精神 (Onzienlijk Grooten Geest) への感謝の念がわきおこるのです (土屋 1991:87-88)。

土屋は一例目と三例目について、浜辺から帰ってきてすぐの時でも既に去ってしまった経験として書かれ、ノスタルジアをたたえたと述べる (土屋 1991:88)。この本の多くの読者には、ノスタルジアをたたえていることを何の説明もなしに感得することは無理であろう。しかし親しいヨーロッパ人女性宛で、楽しかったあの時を強調して書くならば、懐かしさを伴う風景描写になることは理解できよう。さらに、カルティニにとって海へ行くことはいつでもできることでなく、通常は休みの日の朝にのみ許された楽しみであったのである (土屋 1991:87)。

カルティニの風景描写は、オランダ語の雑誌や文学における決まり文句であった可能性が複数の研究者によって指摘されている。そのため普遍的な風景を観念的に記すことになるが、そうだからこそ、誰のものでもあって誰ものでもない、多くの者が受け入れられる風景描写となったと土屋は論じる (89)。

以下の4例目に土屋は「喪失の風景」という小見出しをつけている。この長文の風景描写は、アベンダノン夫人宛て手紙の中にあるが、この手紙を書く一年前にカルティニは初めてアベンダノン夫人と会い一緒に浜辺へ行った。その思い出を記している。

私の目に再び見えてくるのは、白銀の月光に幻想的に輝いている、たえようもなく美しいあの海辺です。月光は、たえずゆれ動く海面に、面の及ぶ限り、無限の反射光を投げかけております。それは金と銀の尽きることのないきらめきであります。

また、わたしの耳に再び聞こえてくるのは椰子の葉のふるえつぶやく音です。それは銀でできた大きな羽根のように、夕暮れのそよ風にゆれ動きます。わたしどもの頬をなで、耳にささやくようにして、そよ風は吹き過ぎてゆきます。

その葉音のつぶやきが、きらめく純白の浜辺に戯れるように碎けては散ってゆく、あのひかりかがやくやわらかな波の群れと、美しく一つに融合合ってゆきました。

それは夢、幸せな夢でした。そして、私どもは、銀の月光がきらめき、水面に金と銀とが流れ、星々が青い空にやさしくかがやき、椰子の葉のそよぎが銀色の光を投げかけ、そよ風が吹き、汀で波がやわらかに碎けているという、この月光に照らし出された海辺の幻想的な世界に取り囲まれて座っておりました。私どもは、はじめて

手にした高価な宝石とともにあって、静かな享楽とつゆのりゆく歓喜の心で、心地よい旋律に耳を傾けて座っていました。その旋律は、はるかに遠い国々のおとぎ話、私どもの眼前に広がる海、金と銀とが果てることなくきらめいているその海のかなたのおとぎ話、海自身の神のような祖国のおとぎ話を語っておりました (土屋 1991:93-94)。

土屋は、「この文章が一種悲し気な色調を帯びているように思われる。」(土屋 1991:94)と書き、「2度と再び戻ってこない、そして求めても決して手にすることのできない世界へのノスタルジア。」(土屋 1991:103)をたたえているとする。その背景には、アベンダノン夫妻が助力したバタヴィアでの勉学の道が父親の反対によって閉ざされ、カルティニが心のよすがを失っていたことがあり、土屋はその喪失感と悲しみが現れていると述べる。

この「悲し気な色調」の主張については、カルティニの挫折を考慮してもなお、独断が過ぎると言われても仕方がないレベルにある。それまでの3例にあるような、カルティニの気持ちが表現されていず、とくにポジティブな気持ちに連なる感謝が不在であることは確かである。もし文中の「おとぎ話」がアベンダノン夫妻からもたらされたバタヴィアあるいはオランダでの勉学の話であったとしたら、この時カルティニはオランダ人高官に頼ったオランダでの勉学の実現を未だ諦めていなかったもので、夫人に悲し気に訴えて実現させようとした可能性もある⁵。いずれにせよ説得性を増すためにはこの手紙の前後にこれらの箇所を位置づける、あるいはカルティニ以外の事例を参照するなどの必要があろう。検索性 IT 機器、web 上の史資料が存在せず、各種研究が進展していなかった 1980 年代は、独断を書きつけるしか方法がなかったとも言える⁶。

最後の例は「時代の風景」(第5章)と題される章の小見出し「ありうべきジャワの風景」の中で、自然描写のうちにジャワ対オランダがくっきりと映し出されている表現として、次の手紙文が引用される。

花と香り、この二つはわたしどもジャワ人のす

5 カルティニ研究者富永泰代のご教示による。

6 喪失の中で風景が輝く類似例が存在する。ホセリサルは処刑前(未来の喪失)に書いた詩の冒頭は祖国の美しさであった(アンダーソン 2007:234-235)。またシベリア抑留者の絶望状態にあつて「自己への関心がついに欠落する時、そのとき唐突に、自然はその人にかがやく。」事態が報告されている(石原 1974:37)。さらに心理学などの理論で補助できる可能性もある。

べてにとって、そしていつでも不可欠のもので
す。

花の薫りと香の匂いをかぐたびごとに、それは私を思い出の世界、心に触れる世界へ導いてゆきます。それは過ぎ去った日々を思いださせ、私の身体に流れているジャワ人の血潮を強く感じさせます。ああ、民族の魂“*ziel van mijn volk*”その起源においてかくも美しく、気高く、詩的で、謙虚で、寛大であったその魂——あなたはいまどこへ行ってしまわれたのですか。過ぎ行く時と日常の繰り返しが、あなたに何をもたらしてしまったのですか。

わたしどもの心は、ジャワ的であるよりもはるかにヨーロッパ的である、としばしばいわれます。それはなんとも心を沈ませる考えです。わたしどもは総身にヨーロッパ的な思考や感情が広がっているかもしれません。しかし、私どもの身体を流れ熱く息づいている血潮、ジャワ人の血潮は決して減らすことはできないのです。花と香り、ガメランの調べ、椰子に吹き渡る風のそよぎ、ジャワ鳩の鳴き声、稲穂の波、米臼の音、これらに触れる時に、私どもはそのジャワの血を感じるのである。(土屋 1991:136-137)

この引用の後に土屋は次のように書く。カルティニの綴る風景描写がナショナリズムに繋がる重要な部分であるので、長文であるが引用する。

カルティニは、このように「美しい章句」、「紋切り型の決まり文句」によって表現できる風景、これこそが＜ジャワ＞の風景であり、時代を越えて受け継がれて来た＜ジャワの血潮＞であることを明言するのである。それだけでなく、そこに見られるのは、それこそ将来にわたって受け継がれていくべき＜ジャワの血潮＞であるという、カルティニの決意と祈りである。それはあの夜の海辺の光景が現実の風景である以上に「夢」に帰属し、いまひとたび手元へたぐりよせたいと渴望する風景であったのと同じように、それによってジャワ人の血潮がかきたれられるような、＜ありうべき風景＞なのである。しかも、重要なことは、この＜ありうべき風景＞が、ノスタルジアと喪失感をその裏側にはりつけていることである。花の薫りが過ぎ去った日々を思い出させることを記し、「わが民族の魂」に触れて、「あなたは今どこへ行ってしまったのですか」と嘆く時、それは、ひとりカルティニの絶唱のみならず、実は、やがてきたるべきナショナリ

ズムの基調音としてなり響くものであった。「ありうべき風景」とは、未来にあって希求すべき風景であるとともに、すでに喪失されたがゆえにノスタルジアとしてある風景でもある。今ではすでに失われてしまったけれども、「美しく気高い過去」がかつて確かに存在していた。そのことを想起し、さらにそれを回復しようとする時、「過去」はただちに「未来」と結びつき、逆に「未来」と「過去」とは手を携える。それがやがてナショナリズムの原動力の一つとなっていくのである(土屋 1991:137-138)。

(中略)

つまり、このようにして風景が輪郭と名称を得て、その帰属先が他のどこでもない「ジャワ」であると規定されること、そのことは、風景に文化的な意味が与えられ、その文化的な意味付けによって、風景が自他を弁別する源泉と化することにほかならない。カルティニがインドネシア民族主義の先駆者であるという事柄の核心は、実に、このような彼女の自覚とじかにかかわっているであろう。なぜならば、ひとたびこのような自覚が表明されてそれが共有されるようになることこそ、近代のナショナリズムの要諦だからである。そしてこの理念は「クリシェ」として初めて共有されていくのである(土屋 1991:138-139)。

カルティニの手紙の最後の例もまた、これを自然描写と言えるかなど、3例目と同じように別の読み方が可能である。しかし上に引用した土屋の思考は、もはやカルティニの文章をも置き去りにして、風景のジャワへの帰属、そしてナショナリズムへと疾走する。そのスピードとリズムはスカルノの演説を連想させさえする。土屋は自らの感情から生まれる思考の流れを定着させることを読者の理解に優先させている。この本の他の部分でも同様の傾向がみられ、史料を吟味したり、学説を検討することは少ない。カルティニの風景描写がナショナリズムへ連なる議論は、入口と出口が抑えられていて卓抜な着想・発見であるが、根拠史料が少なく中間がブラックボックスとなっている。このような場合にはスピードと名調子がなければ、説明はなりたないであろう。しかし問題も残る。インドネシア近代史を専門とした筆者にとっても準備と思索がなければ理解が簡単ではない本書を、どれだけの数の人が理解できるのだろうか。

とはいえ、今世紀の心理学や脳科学の発達で、これらの学問の理論や仮説が土屋の議論を援護する可

能性が広がって来た。既に土屋は、ノスタルジアの体験が生じる必要条件は「良い過去・悪い現在」という明らかな対称が成り立つこと、現在もしくは差し迫った状況に対するなんらかの否定的な感情を背景にして、生きられた過去を肯定的な響きでもって呼び起こすことという心理学の議論（デーヴィス 1990）を知っていたと思われるが、さらに最近では、喪失が意味を求める傾向を持つことが研究されている。

なおノスタルジア・共感に関して、本章以降は平易な叙述が続く。

3.2 カルティニ書簡集とカルティニの願いへの共感

第6章に相当する「風景の行方」（土屋 1991:145-180）ではカルティニ書簡集の出版を出発点とした時空を超える感動・共感の拡大が具体的に描かれる。

1911年にオランダ本国でアベンダノンの編集になるカルティニ書簡集が出版されるとベストセラーとなった。「第一刷は数か月のうちに売り切れ、同じように第2刷も売り切れ、1912年末までに第3刷が発行された」（土屋 1991:150）、1923年に第4版、1976年に第5版が出ている。オランダ在住のインドネシア人留学生にも深い感銘を与えたという（土屋 1991:174）。書簡集の翻訳は23年版のアベンダノンの解説によれば、すでにマレー語のほか、ジャワ語、スンダ語、マドゥラ語、バリ語などのインドネシア各地方語に訳されたほか、英語、アラビア語、フランス語、スペイン語、ロシア語で翻訳されたと言う。カルティニの評伝は、インドネシア独立後に多く書かれ中でもプラムディヤ、シテイスマンガリ・スロトのものが有名である。さらにカルティニ書簡集はその売り上げを、オランダ領東インドの女子教育のための「カルティニ学校」を建てる目的で出版されたため、女子教育が注目され多くの寄付が集まった。そしてバタヴィア、メーステル・コルネリス、ボゴール、マディウン、マラン、プカロンガン、チレボン、インドラマユなどに学校が建設されていった。カルティニとその書簡集は国際的なエリートの間で共感呼んだ。これはオランダでオランダ語の初版が出版されたことにある。オランダ領東インドでの共感、まず女子教育の分野でひろまり、その後ナショナリズムに取り込まれたと言える。

こうしてカルティニは時空を超えてそれぞれの土地・時代で選び取られたが、意義・感動の側面は各地域でそれぞれであったと言える⁷。

3.3 クロンチョン音楽への共感の広がり：

誰が歌い、誰が聞くか

「クロンチョン音楽の旅」（第7章）ではこの音楽が、カルティニと異なり、ジャワ中心に面的に広がることを示す。

バタビアの東の郊外にトゥグーという集落があった。ポルトガル系の住民が居住し、見たことのない故郷ポルトガルの文化を伝えていた。クロンチョンの起源はポルトガルで歌われていた「船曳唄」や「子守唄」であったという。19世紀後半にトゥグーからバタビアへ道路が通じ、クロンチョンはバタヴィアにもたらされて人々の心を捉えた。まずユーラシアンの青年、ついで華人・バタヴィアの若者たちに受け入れられた。ユーラシアン・プラナカンは両属性、無所属性、偏在性を有する者達であるとともに、差別を受けやすく裕福ではなかったであろう。彼らはクロンチョンを流して歩き、たいそういなせで良家の子女を惑わす不良の輩と見なされた。クロンチョンは、19世紀末までにはバタヴィアにしっかり根を下ろしたものと考えられ、人気を博してバタヴィア以外にも伝播していった。

一方、ユーラシアン・華人を主体とする大衆劇コメディ・スタンブルが出現してクロンチョン音楽を使用し、1891年からはこの大衆劇の劇団がバタヴィアなどの大都市に設立された。そこからクロンチョンの人気歌手が誕生し、楽団、観客にインドネシア人が増えるにしたがって、クロンチョンにもインドネシア的曲が増えた。ただしクロンチョン音楽のうち半数以上がいつどこで誰が作曲したのか全く不明であった。

クロンチョンは聴衆が身銭を切ることで支えられてきた。そこで観衆の目を開かせ、耳を傾けさせ、ひと時苦しい日常を忘れてもらう必要があった。非日常の男女の愛や恋、月光や夜の海、いまだ見えざる世界、かつてありし世界が歌われ、人気＝共感を獲得していったのである。

1925年にラジオ放送が始まるとクロンチョンの番組が生まれ、人々に口ずさまれるようになった。当時書かれた小説にもクロンチョンを口ずさむ人の姿が描かれるようになる。そしてナショナリズムがクロンチョンを受け入れ祖国インドネシアのものとの認識が広まった。

クロンチョンは、カルティニ書簡集および風景画と異なり、優れて民衆のものであり、市場を介した消費によって支えられてきたと言える。

7 オランダ生まれのパチャ・メスキータ著『文化はいかに情動をつくるのか——人と人のあいだの心理学』（高橋洋（訳）、2024、紀伊國屋書店）は心理学の観点からこの問題を論じている。

3.4 独立後の公定ナショナリズムと 1980 年代の若者の歌

クロンチョン音楽に続いて、第8章にあたる「うるわしの東インドの旅」では植民地期の風景画の展開が説明される。その後最終章の「うるわしのインドネシア」では、インドネシア中央政府の政策による「うるわしのインドネシア」が公定ナショナリズム拡大の一環として宣伝されていく様子が描かれ、最後に、公定ナショナリズムとは異なる心象風景を歌う若歌手エヴィートの「友への便り」の心象風景と聴衆の共感が語られて終わる。

友への便り

友よ、旅の便りを届けます
この旅はかなしみにとざされた旅でした
君とは一緒に来れなかったけれども
この石ころだらけの旅路では
多くの物語と出会うことになりました
草のしおれ、石くれの鈍く光る荒れ野に
泣きじゃくりながら牛を追う子供がいました
どうしたのと聞くと、父も母も遠い昔に居なくなりました、天変地異に飲み込まれてしまったのですと答えるばかりです
このくにはどうしてこんなにもわざわいが多いのだろうか
そのことを海に問い山に問い空に問うても
森閑として蓍も返ってきません
それは、神がわれらの所業を厭っておられることのしるしなのでしょう
それとも、自然がわれわれを疎み友とすることを嫌っていることのしるしなのでしょう
友よ、風にゆれる草の葉に向かって
どうかそのことを、尋ねてみてください（土屋 1991:263-264）

土屋は本書で自らが辿って来た「うるわしのインドネシア」に唯一の価値を与えてはいない。「『友への便り』に限らず、エヴィートの数々の歌を通して映し出される風景は、光と色彩に満ちた常のインドネシアのイメージ『うるわしのインドネシア』とは、また別の世界を伝えている。」（土屋 1991:266）と述べ、中高年と若者の反応を次のように対比する。

その当時、エヴィートのメッセージが熱く迎え入れられていることについて、これは、主情への退行であってめめしいことだとなげく声や、抵抗の歌であるとして嫌悪の情を示す人々もあっ

た。だが、「友への便り」に耳を傾ける若者たちは、このひき語りのリリズムにいつとき心を洗われ、そのことによって、彼らの生きていける社会に対してシニシズムに陥っていくことをきわどく阻止し、この社会にあらためて希望を繋ぎとめようとしているように、私には思われた（土屋 1991:267）。

土屋は開発独裁下のインドネシアの経済的繁栄を肯定的に見ることができなかった⁸。本章冒頭の池端への手紙の中にある「しみじみ思う」はノスタルジアの言い替えの言葉でもあり、「ひととひとが心を通い合わすことができ、明日が今日よりも良くなることを信じ、勝つために闘うのではなく（場合によっては敗れることが解っていても）自分を越える価値のために闘う」ことが、インドネシアにかつてありもうないものであることが示されている。土屋は押川典昭をはじめとする何人かの人々に、インドネシアに対する幻滅を語った。筆者もまた土屋から直接聞いたことがある。このノスタルジアが土屋の目を異なった未来に向けさせたと推測される。

3.5 未来の開放

土屋は未来について若者に期待していた。25歳で亡くなったカルティニ、初期クロンチョンを広めたユーラシアンの若者、ナショナリズム運動の草創期、エヴィートらはほとんどすべて若者であった。そして風景の変遷における未来に、次のように思いを馳せる。

カルティニ以来の自己表現の伝統につながりそれをリフレインしながら、いま目にしている時代の風景を描きあげる人々が、この先、次から次へと、インドネシアの地平線の上に姿を現してくるのであろうか（土屋 1991:268）。

「風景」はなお道半ば、これからさらに旅を続けるだろう。それはどのような旅となるのであろうか。次の世紀にその形を作り上げてその行方をまず見届けるべきは、もちろん、インドネシアの次の世代である。その時、日本の次の世代も、

8 遺稿「負けないぞ」（土屋 1995）は、1977年に23歳だったユディスティラの文学の検討であり、この小説がカルティニおよび19世紀の伝統を背景とすることを指摘している。しかしカルティニ、風景画、クロンチョンがナショナリズムへ接続されるような未来への回転はないままであった。そしてユディスティラの小説で開発下の物質的繁栄を享受しながら既存の価値を破壊する少年を描く『アルジュナは愛を求める』には言及がなかった。

自らのところをアジアに向かって解き放つことになるのであろうか（土屋 1991:269）。

このような若者の新たな表現が風景を作る、すなわち未来を創ることへの土屋の期待がナショナリズムを越えさせる。『カルティニの風景』の最終章と「あとがき」は、ナショナリズムなど盛衰や終わりのある概念・事物を主役とすることによる拘束から、未来を開放することに成功している。未来はフロンティアとなる。開発独裁下での物質的繁栄を眼前にして、古き良きジャワへの喪失感を覚えた土屋が、カルティニにひそみ、ありうべき風景を次世代の若者に託したのかもしれない。

このことはさらに、革命的とでも言える思考へ繋がった。国軍＝中高年男性が最上位の世の中に未来を創る主役として若者・女性・弱者をより上位に配したのである。公定ナショナリズムに対して下方に押しやられ覆い隠されるものを主体としたことになるが、この姿勢は21世紀の社会状況・社会課題と研究に繋がる⁹。

4. 2020年代に繋がる『カルティニの風景』

4.1 「共感の共同体」の形成とその媒体：

時間軸の開放性

「共感の共同体」はある事物に関して共同体内で同じ感情が抱かれることを指す感情史の用語である。この用語を念頭に、『カルティニの風景』に示される事物について共感を持つ人の広がりや、媒体と受け手に注目して時系列で整理すると、次のようである。

出版：ニヤイ物語（マレー文学） 読者 主に都市の住人

出版：カルティニ書簡集（オランダ語） 読者 初期はオランダと蘭印のエリート層

流し：クロンチョン バタビアの民衆

劇場：コメディ・スタンブル（バックミュージックはクロンチョン） 都市の住人

ラジオ：1925年ラジオ番組クロンチョン 市井の人々、都市以外にも広がりを持つ。

（映画・レコードは記述無し）

（TV：公定ナショナリズムの媒体 一文のみ254頁）

ラジカセ・民間放送局の林立：ダンドット、ジャイ

9 タマンシスワから土屋を移行させたものは何か。土屋の感じるノスタルジア（はじめの混沌としたアルモフなしかし一種前に進む希望に満ちた時代が過去のものとなってしまっているインドネシア）とともに、本人の喪失体験（1987年母親、87年永積昭の死）も影響を与えた可能性がある。

ボンガン等 都市、町、村落 外島へ

以上、媒体の発達によって受け手が拡大してゆくことが解る。しかもこれらの事物は市場を介した消費によって支えられており、共感が拡大することを説得的に示している。

『カルティニの風景』以降の世界については、共感をキー概念とはしないものの、独立後から2020年代までのポピュラー音楽の展開を金（2023）が辿っており、若者が主役級の発信者であることが解る。土屋と金の分析では史資料の制約があり、共感する者の拡大は解るものの「共感の共同体」の狭義の意味である共通の了解が形成されるか否かはわからない。しかし21世紀に入ってからネット配信・SNSによって共通の了解の形成を追うことが技術的に可能になってきた。土屋の分析に無理なく繋げることができ、かつ研究の意義がある。土屋の研究に直接接続させるためには、風景、喪失感、ノスタルジア、未来をどうとらえるかなどの確認が必要であろう。一方、日本・韓国・中国・インドのポップカルチャーとの関わりにも注意する必要がある¹⁰。

4.2 感情史・感情とパブリック・ヒストリーとの繋がり

喪失の経験から生じるノスタルジア（過去への感情）が、過去を再定義し未来に回復すべきものと認識されるナショナリズムに繋がることは土屋が起した議論であるが、この前半部分が2020年代の日本の若者にも起きている。

Anna Clarkは人々が「過去」について問い始めるきっかけとして「死」に直面した時、「老い」に直面した時、「喪失」を経験した時であり、ライフイベントと人々の「過去」に対する意識との間には関係性があるとする。しかしパブリック・ヒストリーの実践の現場である高校の日本史の授業から、ライフイベントと言えない「喪失」の経験からも「過去」と現在に対する意識の変化が見られた事例が報告された（徳原 2024）。ある不登校気味の高校生が（差別、排除によって）「自分の居場所がここじゃないって感覚がずっとあって」（感情）、「先生の授業は感情を扱うから出席している。」と言っていたが、祖父との交流から歴史への問い・関心が生まれた。さらに同じ痛みを持つ級友との会話で過去に関する感情表現がそのまま受け入れられると、過去・現在の社会との接続のし直しが起きた。この事例を報告した高校教

10 筆者は2024年1月に30年ぶりにダンドットをユーチューブで見て、AKB48などの日本のグループに似ていたので驚いた。

論は、この過程に教諭の役割は少なく家族や級友の役割が大であったこと、そして歴史の授業によって、先生も生徒も皆が緊張や抑圧から解放され、皆がケアされるよう願うことを述べた。

感情とパブリック・ヒストリーの繋がりは教室に留まらない¹¹。感情史を専門としている森田は言う。

歴史学の未来を開いていくためには一般の、ともすれば素朴な歴史への関心を取り込んでいく必要があって、その意味ではいわゆる「パブリック・ヒストリー」も重要になると思うんです。(中略) アカデミックな歴史学の外で行われる歴史実践を総称してパブリック・ヒストリーと言いますが、大学で歴史学を研究している人たちがそういうものを「自分たちとは違う」と言って切り離してしまうのはダメなのではないか。(中略) 感情という視点の間口の広さには可能性があるのではないのでしょうか(森田 2023:20)。

本章冒頭の二番目の引用および森田の発言にあるように感情史は分野横断の可能性を持っているが、『カルティニの風景』はノスタルジアと共感によって文学、音楽史、絵画史、政治思想史などの具体的分野横断の事例を示す。日本では人口減少によって人文学はダウンサイジングを余儀なくされること、AIでは補えない個人の処理能力の限界から研究の質量が右肩上がりはありえないことを考える時、分野横断を可能とするコンセプトの発見は極めて重要である。

5. 土屋健治が抱える 20 世紀的制約

『カルティニの風景』で土屋は若者への着目と未来への希求によって時間軸における顕著な開放性を獲得したが、空間的開放性は弱い。土屋の努力は、ナショナリズムの誕生にむけてジャワとオランダを峻別することに注がれた結果、記述は本人が魅了されたジャワと宗主国のオランダに集中する。特に外島に関する言及は少ないが、外島はカルティニの時代および 1970・80 年代には経済のフロンティアであった。

空間の開放性について考察対象が、おそらく史資料の制約によって、風景描写と風景画に偏ったこと

が説得性を弱めた可能性もある¹²。土屋は誰のものでないがゆえに誰のものでもある風景がジャワへ帰属し、時間性と空間性を脱したとする。しかし語られる風景は、カルティニの居住地、旅行先、カルティニ書簡中に挿入された風景の挿絵とその風景描写、そして特徴が一括して抽象的に語られる風景画であり、ジャワへ偏った印象がある。たとえば、カルティニが「稲穂の波、米臼の音」(土屋 1991:137)と書く時、外島で主食がコメでない地域の人々はどうのように感じるだろうか。

このジャワへの偏向のある風景がその他の地方に受け入れられる状況は次のように書かれる。1938 年初訳のインドネシア語版カルティニ書簡集中の挿絵は西ジャワの田園風景であり、翻訳者(インドネシア人)はジャワ語文化圏ではない西部ジャワと中部ジャワを区別していない。土屋もまた同様であり、書簡集の湛えるノスタルジアの雰囲気は挿絵が見事に伝えているとしている。言葉を変えていうと編集者・翻訳者の感情や観念が散布されることになる(土屋 1991:80-81)。「絵画は(音楽も同じであるが)言語圏が変わっても翻訳する必要がなく、言語のバリエーションがない分だけ、その拡散は早く容易である。こうして、言語と文化を異にする様々な人々がこの様式の絵画を描き、また購入していった。」(土屋 1991:118-119)のである。

さらにジャワの風景・風景画をジャワにきた外島のナショナリストが祖国インドネシアの風景として観念的に受け入れるとする。事例として西スマトラ出身のヤミンの詩が、当初は西スマトラの美しい風景を讃えていたものが、政治活動の過程で美しい祖国インドネシアを讃えるようになったことを示す(土屋 1991:221-223)。このことは、ナショナリズムが優れて観念の産物であり、受容される具体的地方の生態・生活文化を無視していることを示す。土屋の言うインドネシア文化は外島においては何時、どの地域まで、どの層まで広がったかを考えるとき、かなり限定的であったと言わざるを得ない。なかでも風景画の所有は植民地期はエリート、その後もある程度富裕な者に限られていただろう。2020 年代から見れば、なぜかくもジャワに集中してよかったのか。史資料の制約を考慮してもなお疑問が残る。

そこには 20 世紀後半の時代的制約である土屋のエリート性が垣間見える。クロンチョンを除いて、『カルティニの風景』が専論する事物の発信者・受容者はエリート・いくらかの金持ちであり、絵画は書き

11 たとえば、アメリカで一般の人々によるファミリーヒストリーが盛んであるが、親密な他者の話(「個人的経験」と「紐帯」)が「過去との接続性」を人々にもたらす重要な契機となっていると言う。また研究者がパブリック・ヒストリーにおいて一般の人に活動を理解して受け入れてもらうためには感情、立ち位置の工夫が必要である(西村 2019:177-180,188-189)。

12 クロンチョン音楽の空間的広がりも言及されるが、地名がないために無理に広がり強調しているかの感がある(土屋 1991:125; 196-197)。

手も所収者も若者主体ではない。共感の広がりも思想・歌詞の製作者・編集者、広めるメディアのことが中心的に書かれている。史資料の発掘が難しい受け手についても説得的に書かれているものの、主役は作り手である。民衆から見上げる視線はとられず、対話的姿勢も欠如している。土屋にとって関心事であるエヴィートの歌への若者の熱狂も、エヴィートのコンサートでは周囲の人と会話をせずに、観察されたもの、観察から引き出された土屋の思考が記された。土屋が直接質問するのは、インドネシア大学で土屋の講義を受講する学生、すなわち上下関係のある者のみであった。

また『カルティニの風景』は、読者にとって、とくにインドネシア近代史を知らないものにとって読みやすいものではない。自らの感情に裏付けられた意識の流れを重視し、頻繁に読者を置き去りにする。参考文献その他を援用して土屋の意識や感情を少しづつ辿りながら理解すると、初めてその卓越性が解る。別言すれば感情は環境の変化に刺激されて起こるので優れて環境依存的であり、偶然同じような体験を持つか、事物が生じた環境の知識がなければ、理解不可能である¹³。

以上の、若者革命を心のうちに宿しつつもなお残る、土屋のエリート性・上からの押し付けに見える態度、そして2020年代から見ると空間の開放性の弱さは、土屋の個性ではなく、20世紀後半のインドネシア地域研究の学術的姿勢、そして現実の政治経済・科学技術の発達状況という時代的制約を背景としていたと思われる¹⁴。

インドネシアにかかわる国家論・権力論を概観すると、著名なものは20世紀後半に集中する。これらは国家の内部を考察対象とし、地域的にはジャワ・バリに集中する。なお国家論（権力論）の対象が国家の内部であることは欧米で語られる権力論と同様である。C. ギアツの王権論である『ヌガラ』はバリを事例とする劇場国家論として高い評価を受けたが、現実の国家の外にあるオランダ植民地政庁・華人の活動・貿易動向の影響には触れない（ギアツ 1990）。

さらに歴史的展開もほばない。B. アンダーソンと土屋健治がそれぞれ論じるジャワの権力概念も同様である（アンダーソン 1995; 土屋 1982）。両者とも権力の中心からトップダウンで画一的に語られる。具体的時間空間がなく、ジャワでは未来永劫万人がそのように観念しているような印象を受ける。これに対して白石隆の官僚制国家論は具体的であり歴史性を有するが、中央であるジャカルタから地方への言及はジャワ中心かつ画一的である（白石 2000）。

この研究動向は、おそらく20世紀後半における中央政府から地方勢力への抽象的非歴史的観念の散布、すなわち、誰のものでもないで誰のものでもあり、受容されやすい観念（たとえばパンチャシラ、開発など）を中央政府が地方統治に多用していたことが背景にあると考えられる。中央政府は、植民地支配の遺産である巨大官僚組織を活用し／せざるを得ず、開発援助を国家プロジェクトとして実装する。地方の支配層・有力者は国軍の軍勢力の下に開発プロジェクトで資金供与を受け、地方の各層は翻訳的適応を示す（白石 1996）。こうして文化が統一されていなくても、ナショナリズムが充分浸透しなくても「バラバラで一緒」（立本成文）の統合が成立し、抽象的非歴史的観念は流行が変わると新たにまた作り出される。20世紀の中央と地方についての関係は今後詳しく検討する予定である。

以上のような20世紀後半の相対化は、21世紀に入って展開してきた民衆の思考世界の研究と対比して明らかになった側面がある¹⁵。土屋の述べるように中央集権の国家システム・軍による公定ナショナリズムの民衆への押しつけは存在した。しかし土屋が『カルティニの風景』の最後の部分で述べるように、市井の人の国民意識・感情は別の存在であり、簡単に刷り込まれない人々がいた。国民個人の側から見ると歴史観・アイデンティティに重層性があり、ナショナル・アイデンティティはいくつかあるもののひとつであり、重要度は各人が異にする。おそらくTPOでも変化するのであろう。

こうしてみると土屋は、カルティニのように過渡期に生きた研究者かもしれない。試みにB. アンダーソンと比較するならば、感情・共感を核とした土屋の21世紀における優位性が明らかとなる。たとえば『想像の共同体』は言葉・理性に集中し、特に使用された言語が何語であるかを重視して、感情について

13 たとえば筆者は2代目浜っ子（横浜生まれ）であり、田舎を持たない。メスティン文化、異国の文物へのあこがれ、ユーラシアン若者の寄る辺なさ、彼らがいなせであると言うのは非常に共感できるが、さりとて土屋の描く情景と同じかどうかは心もとない。

14 土屋は日本においてヨーロッパ的枠組を押し付けられ、鬱屈していたようである。インドネシア留学から帰国後、絶えることなくクロンチョン音楽を聴いていたというが、この音楽を聴くと頭の上に押し付けられている何かが天蓋が開くように軽くなると、手ぶりを交えて語ってくれたことが、筆者の記憶にある。

15 事例として次が挙げられる。土屋喜生、2024。「歴史認識論争と草の根の歴史観〈ダバオ滞在記2〉」『CSEAS ニュースレター』82 (<https://newsletter.cseas.kyoto-u.ac.jp/nl-82/tsuchiya-4/>、閲覧日:2025年2月21日)、今福龍太、2024。「『現在の歴史』を生きる」朝日新聞、2024年11月1日、11面。

の議論はほとんどない。国歌斉唱が無私の状況を作り出すとして（アンダーソン 2007:232-233）、「ただ言語だけがとりわけ詩歌の形式において一示する特殊な同時存在的な共同性がある。」（アンダーソン 2007:238）のであろうか。アンダーソンはナショナリズムが言語によって想像された共同体の一種の形態であると捉え、さらに人々が国民に対して特別な愛着の感情を持つ根本的な理由として、国民という言葉には自己犠牲を伴う愛情を喚起すると説明している。これ以上の具体的説明はない。『カルティニの風景』を前にすると、ほんとうに愛国の感情はそのような形でしか喚起されないものであろうか、との疑問が沸く。さらに AI 技術の進展によって言語の違いが障壁になる度合いが絶対のもではなくなってきている現在、アンダーソンの言語（国語）への固執が奇異に思われる。

『想像の共同体』はロゴスによる見事な腑分けと曖昧さを許さない概念によって 2020 年代においてもブリティッシュな広域の議論が展開されている。しかしその一方で、各国の比較に重点を置いたために、国内において視線は国家の中心から発せられ、主体もエリート中心である。ジェンダーを考慮した場合、男性主体の可能性が大である。そして市井の人の意識・感情のレベルへの言及は少ない。ナショナリズムの展開の限定性が伺われる。

6. おわりに

最後に『カルティニの風景』で、インドネシアのこころのありようを把握するために使用された方法を中心に、土屋健治論への足掛かりを得たい。

第一に、土屋は、ノスタルジアが未来（ナショナリズム）への原動力となるという卓見と、それを、風景を中心とする具体例で繋げる力技をなした。ノスタルジアという感情と共感を核に、高谷同様、自分の体験から研究を開始して個別の事象間の関連を発見した。バラバラなピースが一つの像となったわけだが、このような才能は、生来の資質に加えて、いっどこでどのような知識、体験から得たのであろうか。

第二に、土屋によれば、若者は未来の風景の創造者で期待すべき存在であり、他方、公定の「うるわしのインドネシア」を上から民衆に押し付ける主体は、中高年、おそらく男性である。既存の価値の転換であり、土屋の意識中の若者革命とも言える。またこの思考は中央中心史観・進歩史観から逃れられない近代的枠組や観念で現在や未来を拘束しない。感情（ノスタルジア）・共感に優れて環境依存的であり、

環境変化が現場感覚の変化を生み、さらに意識の変化、価値観の変化を促す。この側面で土屋の思考はナショナリズム、および B. アンダーソンの議論を越える。土屋はどのようにしてこの思考を手に入れたのだろうか。

第三に、『カルティニの風景』は、環境の悪化で既存の価値観が崩れ精神的危機にあるときの対処法の一つを提示している。単純だが具体的な過去・現在・未来の接続のしなおいし、周囲の人々との接続のしなおいしを提示しており、その意味で救いの物語となっている。この点でパブリック・ヒストリーの実践との交差がみられる。このほか様々な学問分野との分野横断性がみられるが、分野横断性は何によって生まれるのであろうか。

第四に、土屋にない発想は、21 世紀に研究され始めた民衆のアイデンティティのありかただと言える。民衆にとってナショナリズムはいくつか持つアイデンティティのうちの一つである。この点で、土屋はなおナショナリズムに縛られていたと言えようか。1990 年の東南アジアを概観するにあたり国家を中心に論じたあとで「ここでは、時代はいまなおナショナリズムの時代である。」（土屋 1991:271）と述べて終わる。

第五に、土屋は『カルティニの風景』において、自らの意識、思考の流れを滞らせないように書きつけることを最優先した。自らのノスタルジアをよすがに分野横断的、かつ公共圏も親密圏も区別しない思考の疾走である。この読者を置き去りにする思考の疾走は、高谷、そして桜井の『東南アジア世界の形成』にも通じるものがあり、既存のアカデミズムの枠内に入らないとしても作品として未来に開かれたものである。この疾走の原動力は学生時代にインドネシアに留学し、滞在したジョクジャカルタにおける至高のジャワ体験であろう。土屋は終生、この体験をよりどころにインドネシアを描いていた。魅せられた理由、経緯、終生変わらなかった（無反省であった）理由を探る必要がある。

その一方で、2020 年代という価値の転換期で次の文化の模索が必要な時には、いくつもの具体的事象の繋がりを発見するために、学問分野の境界線の下に広がる深い水脈に向けて、時代感覚、知識・体験を携えて潜水する、土屋、高谷、桜井のようなファースト・ペンギンが何人も必要である。潜水して感情と言うキーを得た土屋のような若者が近い将来に出ること、それが学問分野の根源的な再編につながることを、また若者の周囲には土屋のように若者を暖かく見守る先輩たちがいることを祈りたい。

土屋はカルティニと同様に過渡期あるいは狭間の

人であったのかもしれない。第三章は期せずして、土屋のノスタルジアが未来へ繋がる点で、土屋の議論を援護していることになった。このワーキングペーパー脱稿予定日の2024年2月27日が30回忌となる土屋が見たら、このワーキングペーパー全体がノスタルジアを湛えていると言うだろうか。

参考文献

- アンダーソン, B. 中島成久 (訳). 1995.『言葉と権力——インドネシアの政治文化探求』日本エディタースクール出版部.
- アンダーソン, B. 白石隆・白石さや (訳). 2007.『定本 想像の共同体: ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山.
- 池端雪浦. 1993.「書評 土屋健治著『カルティニの風景』」『アジア研究』40 (1). 153-164 頁.
- 石原吉郎. 1974.『海を流れる河』花神社.
- 小野寺拓也・森田直子. 2023.「感情がひらく越境と革新の可能性」『現代思想』51 (15). 8-21 頁.
- 金悠進. 2023.『ポピュラー音楽と現代政治: インドネシア自立と依存の文化実践』京都大学学術出版会.
- ギアツ, クリフォード, 小泉潤二 (訳). 1990.『スガラ: 19世紀バリの劇場国家』みすず書房.
- 白石隆. 2000.『海の帝国: アジアをどう考えるか (中公新書1551)』中央公論新社.
- 白石隆. 1996.『新版インドネシア』エヌティティ出版.
- 土屋健治. 1982.『インドネシア民族主義の研究——タマン・シスワの成立と展開』創文社.
- 土屋健治. 1991.『カルティニの風景』めこん.
- 土屋健治. 1995.「ユディスティラ「負けないぞ」—トラウマの文学を論ずる」『人文学報』75. 151-178 頁.
- デーヴィス, F. 間場寿一ほか (訳). 1990.『ノスタルジアの社会学』世界思想社.
- 徳原拓也. 2024.「パブリック・ヒストリーと教室空間」大阪大学歴史教育研究会第161回例会報告 (2024年10月19日).
- 西村明. 2019.「いまに生きる、いまに生かす歴史的空間における歴史実践—「Oターン郷土誌家」を目指して」菅豊・北條勝貴 (編)『パブリック・ヒストリー入門: 開かれた歴史学への挑戦』勉誠出版. 176-193 頁.
- メスキータ, パチャ (著). 高橋洋 (訳) 2004.『文化はいかに情動をつくるのか——人と人のあいだの心理学文化はいかに情動を作るのか 人と人の間の心理学』紀伊國屋書店.
- 森田直子. 2016.「感情史を考える (研究動向)」『史学雑誌』125 (3). 39-57 頁.
- 森田直子. 2020.「歴史学は感情をどう扱うのか——罵りをめぐる感情史の一試論——」『エモーション・スタディーズ』5 (1). 45-55 頁.
- 山本圭. 2023.「公共と情念: いつか来る感情政治学のためのノート」『現代思想』51 (15). 157-160 頁.
- ユディスティラ ANM マサルディ. 押川典昭 (訳). 1993.『アルジュナは愛をもとめる』メコン.
- ローゼンワイン, B. H.・R. クリステリアーニ (著). 伊東剛史ほか (訳). 2021.『感情史とは何か』岩波書店.
- 『土屋健治追悼集』刊行会編. 1996.『時間の束をひもとして: 追悼土屋健治』『土屋健治追悼集』刊行会.